

広島の思い 私も伝えたい

糸田さん(吉田出身)復興の展示施設で案内人

高校時代に長崎派遣 平和考え続け

吉田町出身で広島市の観音大2年の糸田陽菜さん20は、米国による原爆投下後の地場産業復興の歩みを伝える展示施設「Pride of Hiroshima(プライドオブヒロシマ)」のアテンドスタッフとして、活動している。「広島出身者のように平和教育を受けていない私が案内して良いのだろうか…」と葛藤を抱えつつも、広島の人々が積み重ねてきた復興の歴史と向き合い、思いを伝え続けている。



地場産業の戦後復興の歩みを伝える展示施設でアテンドスタッフをする糸田陽菜さん
＝1日、広島市中区

戦後81年
しずおか

押し入れの中にあつた亡き曾祖父の戦争体験記を発見したことをきっかけに、2年前、当時榛原高3年生だった糸田さんは静岡県内の高校生が平和を学ぶ「長崎派遣代表」に選ばれた。現地を訪問し、高校生らと交流する中で被爆地の広島と長崎の高校生の平和への思いの強さに衝撃を受けた。「まだまだ気持ちが足りていなかった」。より深く学びたい気持ちを強く持った。以降、核兵器廃絶を訴える署名活動や母校での出前講座も開催した。

同施設は、2024年4月にオープンし、原爆ドーム近くに位置する。23年の先進7カ国首脳会議(G7広島サミット)に合わせて開かれた期間展示を継承し、地元企業の視点から広島復興の物語を紹介する。被爆からわずか3日間で、銀行や路面電車、新聞発行などが再開した過程や国際平和文化都市への歩みなどの映像展示があり、観光客も多く訪れる。

糸田さんは約1年前に大学で開かれた施設の説明会に参加後、アテンドスタッフとなり、地元住民や観光客に展示を案内する。平和教育を受けてきた広島出身者と自分を比べ、葛藤して

悩む日も多いという。外国人観光客には英語で話しかけるが、言葉のニュアンスが難しく、試行錯誤を繰り返す日々。それでも「広島の人から見た広島を伝えたい」と、外から見た広島を伝えられるのが自分の良さ」との思いを持ち、広島の人々の思いを届けようと奮闘する。

「今広島に住む人や今日の広島を見ている人たちが、これまでどう広島の人たちが頑張ってきたか、広島の人たちの生き方を見て考える時間を自分のアテンドでつくれたら」。これからは、現地で自らが触れた「広島魂」を伝えていく。

(天童支局・小林千菜美)